

白子方面への農業用水路を設けてある。松瀧用水と呼ばれるこれは、現在七、八月の湯水期にひろく利用されている。

地 質

地質はがいて第四紀新層にぞくし、その半ばは、海成沖積の砂土である。表土には、褐色の埴壤土が見られる。砂質壤土、黒泥炭土のところもあるが、その表土は深さ〇、一五から〇、二五の程度で、低土は、主として埴壤土か砂壤土である。一部に、黒泥土や泥炭土もあるが、一般に保水力はよい。地味可良といえるところは約七〇パーセントである。

気 象

一宮町の気候は、寒暑の差がすくなく、温暖である。海流の影響もあって、平均温度は夏期において二五度、冬期において八度で、冬期は結氷もみられるが、日中は解氷する。なお冬期積雪をみることは珍しい。

沿 革

原 始 時 代 (一宮地方)

はじめに わが一宮の地に、はじめて人の住んだのは、いつのことであろうか。その歴史のあけぼのについては、これを考古学の説くところに、しばらく耳をかたむけなければならぬ。

明治のはじめ、米人動物学者 Edward Sylvester Morse (1838-1925) の大森貝塚の発掘研究によって開眼された日本考古学は、皇国史学の潰滅した戦後、めざましい発展をとげた。そのいちじるしい成果の一つが、旧石器時代すなわち無土器文化の発見である。

(3) 年度別降水日数、降水量一覽表

区 分	月 別												計		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
降 雨 日 数	最 高	16	11	19	18	19	24	17	42	20	22	13	14	185	
	年 別	29	31	28	30	31	28	28	28	28	32	30	29	28	28
	最 低	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	
降 水 量	最 高	63.0	59.4	49.5	40.0	63.0	157.0	78.0	76.5	57.0	100.5	92.8	37.0	647.1	
	年 別	29	30	31	29	32	32	32	30	29	32	29	29		
	最 低	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	平 均	4.9	5.7	7.7	8.1	8.9	9.7	7.4	6.4	9.5	11.1	6.4	4.6	89.4	
	平 均	16.9	19.8	20.9	16.9	22.6	32.5	20.2	18.4	22.1	32.1	23.9	13.3	21.2	

昭和二十年代までの長い間、わが国には旧石器時代は存在せず、新石器時代の初頭に大陸、あるいは南方より渡来して、縄文式土器をのこした原日本人の文化にはじまると考え、かつ信じられていた。ところが昭和二十四、五年、群馬県新田郡岩宿遺跡の関東ローム層(いわゆる赤土)中からの旧石器発見が端緒となり、つぎつぎに全国各地から洪積世地層中よりの、まったく土器を伴わぬ石器発見が報告され、その性質もだんだん明らかになってきた。

したがって、最近の日本歴史の第一頁は、石器だけの無土器文化からはじまり、次いで石器と土器を併せ用いた縄文式文化に移り、やがて金属器の使用を知る弥生式文化(青銅器時代に当たる)へ発達したと、大きく書きかえられることとなった。

以下、最近の考古学説にしたがい、既に知られている周辺の先史遺跡および遺物から、一宮の先史時代を概観することとしよう。

無土器文化 縄文式土器の時代に先行するところから、先縄文文化の別称もある。まだ発見されてより、わずかに十年あまりとて、大陸の旧石器時代研究のような文化史体系を樹立するところまでいっていない。黒耀石・安山岩・頁岩・瑪瑙・水晶等を原料とし

た打製石器に限られ、他になんらの文化遺物ともなわれないが、出土地層の新古から種々の形態や用途の相違が見られるのである。現在、考古学者はこれらの旧石器を大きく四つのグループに分類し、古い方から次の四期に編年している。

- 一、ハンドアックス (Hand axe) — 万能の斧に使われた握り斧の時期
- 二、ブレード (Blade) — 物を切ったり削ったりする小刀のような縦長剥片の時期
- 三、ポイント (Point) — 物を突きさす尖頭器、手槍・投槍の先端につける石槍の時期
- 四、マイクロリス (Microlith) — 細石器と呼ばれる、こまかい

石刃の時期で次の縄文式時代には姿を消す。もとより定説ではなく、無石器文化資料収集期の仮定と見るべきものである。したがって、一方には無石器文化にも磨製石器を伴うことを強調し、その源流をシベリア新石器時代にもとめて、

「縄文文化の前に、いわゆる無石器文化があるが、磨製石器が伴出し、無石器新石器時代とみるべきものである。その年代の一端は西紀前四〇〇〇年前後とみてよいであろう」(『縄文土器の古さ』山内清男・佐藤達夫—科学読売、一四ノ一二、昭和三十七年十一月発行) という説もある。

(註) 昭和三十四年頃、神奈川県夏島貝塚出土の遺物を米国ミシガン大学グリフィン教授にたのんで、放射性炭素による年代測定してもらったところ、九二四〇年前(誤差プラスマイナス五〇〇年)という結果が出た。そのため、縄文式土器の最古を一万年前後とする見方が一般につよ

期に多い黒耀石が、すでに旧石器時代に存することは、はなはだ興味ふかいものがある。火山系の石にとほしい房総に、信州和田峠か伊豆半島に産出する黒耀石が使われていることは、なんらかの形の物々交換を示唆する。

いまのところ、下総と安房にとどまっているが、君津・夷隅の両郡下には、しばしば洪積世のナウマン象(旧象)化石が発見されている事実から見ても、古い上総地方に旧石器時代を欠如するものは考えられない。この学問の進歩と知識の普及につれて、近い将来に上総といったの丘陵地かけて、旧石器時代遺跡や遺物の発見される可能性は、きわめてつよい。

縄文式文化 縄文式文化(新石器時代)は無石器文化(旧石器時代)につづくものであるが、相互のつながりや人種の異同等については、何もわかっていない。これも、すべて将来の開発にまつ問題である。ただ、おどろくべき悠遠の歳月を経過したであろうことが、考えられている。歴史の歯車は、太古にさかのぼるほど回転速度はぶくなる。西暦前、万をかぞえる年代にわたり、遅々として原始的生活がくりかえされていた無石器時代につづいて、縄文式土器時代もBC数千年の長きに及んだことが推定されるのである。

土器の発明は、ものを貯蔵して身辺におき、あるいは煮沸して食物を加工することにより、いちじるしく生活を向上させるにいたった。この土器には、一般に縄目状の文様をもつものが多いところから、ひろく縄文式土器の名で呼ばれるようになったのである。この語も、既述した日本考古学の祖モースが大森貝塚の英文報告に、土

まり、無石器文化年代も無条件的に何万年前と称する傾向がある。この説は、これに対する一警告とみられるが、最近また米国ウイスコンシン大学で調べてもらった、愛媛県上黒岩遺跡と長崎県福井遺跡の遺物の放射性炭素による年代測定の結果は、一万年以上とくに福井洞穴細石器層など、一四〇〇〇年(プラスマイナス四〇〇年)と出ている(『朝日新聞』昭和三十八年九月七日付)

ともかく、すべては将来の研究成果にまつほかなく、住居や生活の様相等についても、まだよく手がかりが掴めていない。

板橋区茂呂の無石器文化遺跡からは、赤土を角型に焼いたものに黒耀石器片がはさまった遺物が出ている。

そんなところから、火の使用と台地上に住んだことが知られるが、生業は狩猟と自然採取の衣食に明け暮れていた生活が推定されるだけである。

房総の無石器文化

さて、千葉県下における現在の無石器文化遺跡は、どのようなものであろうか。遺憾ながら数カ所の発見にすぎず、また全県空白の状態である。すなわち県内では、

- 市川市丸山、ローム層出土の切出形石器(昭和二十九年発見)
 - 佐倉市吉見、黒耀石剥片(昭和三十三年発見)
 - 印旛郡八街町住野、打製石器(昭和三十三年発見)
 - 成田市久住区荒海、出土石器(成田霊光館蔵—発見年月未詳)
 - 館山市大房崎、ローム層出土の黒耀石剥片(昭和三十二年発見)
- の五カ所が報ぜられている。(千葉県石器時代遺跡地名表—千葉県教育委員会、昭和三十四年三月刊)

いずれも、旧石器時代の後期に属するものとされている。縄文式

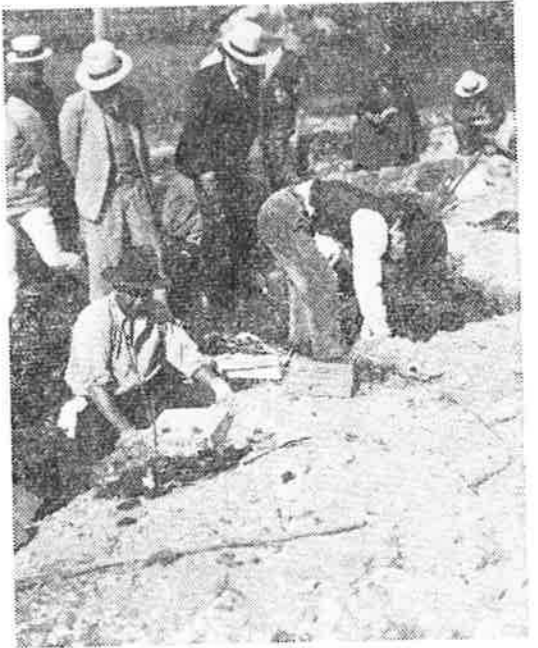
器を Cord marked pottery としたのを翻訳したものといわれ、当初は縄文土器の文字が多く使われた。

ひとくちに縄文といっても、施文は多変多様をきわめ、器形もまたすこぶるバラエティーに富んでいる。縄文専攻の学者は、これら文様の変化や器形の移りかわりを追求して、編年研究が長い間つづけられ、形式分類は微に入り細をうがつに至った。こんにちでは地方差・年代差による分類も、だいたいにおいて大成された観がある。すなわち、文化期は早期・前期・中期・後期・晩期の五つに大別され、各期をまた出土地名を冠して命名した標式土器によって、次表のように更にいくつかに細分しているのである。

表示によって、関東に早くおこり東北に晩くまで存したことがわかり、分布の中心が東国にあった事実を知ることができる。

これを見ると、中期から晩期へかけての土器が、阿玉台式・加曾利式(二型五様式)・堀之内式(二様式)・曾谷式・安行式(三型三様式)と、ほとんど下総(千葉県)に所在する貝塚から出た標式土器の名で占められている点が目される。下総が東京に近接しているため、多くの考古学者が明治・大正・昭和と三代かけて、発掘に情集したことによるが、いっぽうこの国が縄文式遺跡の宝庫であった事実も見のがせない。じつに千葉県は、貝塚の分布三五三カ所に及び全関東一〇三八カ所の中で、茨城県二四一カ所に次ぐ日本一の縄文遺跡地帯となっている。(『日本貝塚地名表』酒井仲男、昭和三十四年九月刊に拠る)

さて各期の土器について、すこしく概要を述べておきたい。



一宮町字貝殻塚貝塚発掘

類・爬虫類・フジツボ類・糞石。文化遺物—土器・石器・骨角器・貝製品。編年—堀之内式。

〔千葉県一宮町字貝殻塚貝塚調査報告〕大山柏・池上啓介・大給尹。史前学雑誌一七ノ二—昭和十二年九月

二、茂原市石神貝塚

地形—台地上。純鹹水性。自然遺物—貝類。文化遺物—土器・石器。編年—加曾利e式・加曾利b式。

〔上総宮ノ台遺跡調査概報〕杉原莊介。考古学六ノ七—昭和十年七月

三、本納町下太田貝塚

地形—沖積地（水田下）。純鹹水性。自然遺物—貝類・獸類・人骨。文化遺物—土器（木尻土偶出土）・石器。編年—加曾利e式。

堀之内式・加曾利b式・安行式。

〔上総長生郡下太田貝塚〕篠崎四郎。先史考古学一ノ二—昭和十二年二月

四、茂原市渋谷貝塚

地形—水田。文化遺物—土器。編年—加曾利e式・堀之内式・加曾利b式・安行I式・安行II式。

〔千葉県石器時代遺跡地名表〕県教育委員会刊—昭和三十四年三月

最後の渋谷貝塚の自然遺物については、なんら記載がないが、下太田貝塚と同性質のものとして推定される。渋谷は下太田を南へ距る、二キロメートルばかりの地である。

ほかに、遺物包含地や散列地は非常に多く、筆者郷里の関係から四十年このかた拾得の土器片・石斧・石鏃等も、枚挙の煩にたえない数にのぼっている。いずれも郡内九十九里沿岸の低地帯を除く西部台地であって、この点はこれらの貝塚が、縄文式文化時代の旧海岸線を暗示するかにみられる。

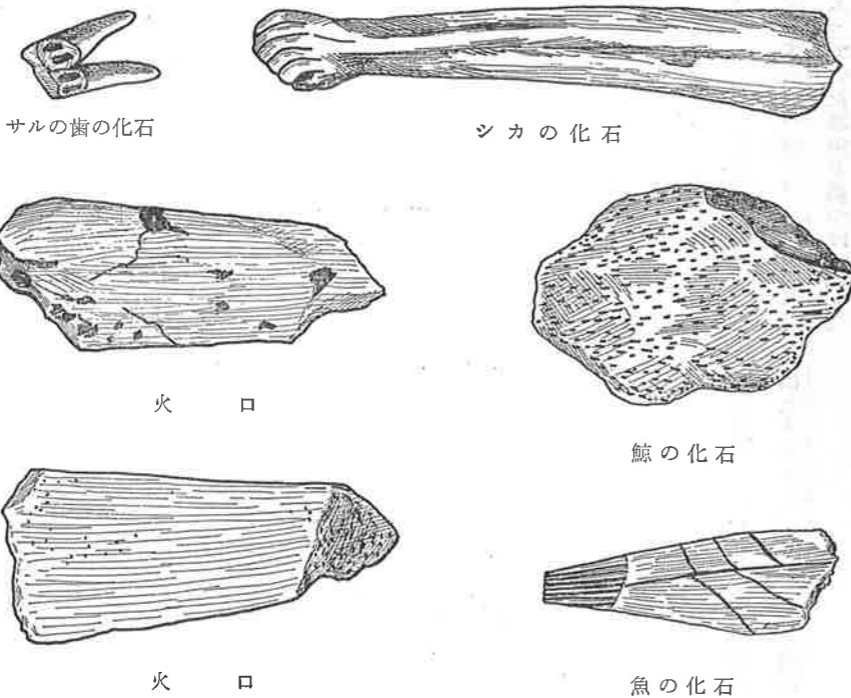
由来、東上総の九十九里浜につづく一帯の平野は、おおむね湿潤、いまなお冬期に沼沢地と化す水田が多く、かつ小規模なる海跡湖とみなされるような池沼も、海岸ちかく随処に散在している。ただし、海岸線後退の地理的所産を物語っているものであろう。

さて、前記の四貝塚が揃って縄文式文化の中期末から後期の土器を出しており、郡下にこれをさかのぼる遺物を見ないことは、浪の荒い太平洋が前期縄文人を近づけなかったためであろうか。東京湾沿岸の下総・上総に、キラ星さながらに散布する縄文遺跡の稠密は、

あったことが想定される。ひとびとには生きがての苦惱もなく、食足りては土器づくりを楽しんだことであろう。何日も何日もかかったに相違ない、手のこんだ成形や複雑な施文には、愉悦とともに製作三昧にふけた彼等の生活感情がにじみでている。そのどれひとつを取って見ても、生活に迫られるものの作品ではない。そこには搾取するもの、搾取されるものの懸隔ある階級は、まだ発生していなかった。ひとびとを支配したのは、自然崇拜と明け暮れの呪術だけであった。

中期以降に出てくる大形石斧の存在をもって、ある種の農耕が行なわれていたと考える学者もあるが、それを裏づける積極的な資料は、これほど遺跡に富んだ本県下にも、いまだ何ひとつ発見されていない。恐らくは、恵まれた海の幸（魚貝）と山の幸（木ノ実・猪・鹿等）は、彼等のむさぼるにまかせて、しかも尽くるところなく、少しも明日を思いわずらう必要はなかったのである。

住居については、大正十五年下総姥山貝塚で初めて竪穴住居跡が掘り出され、これが契機となってその後全国的に発掘調査が成果をあげ、今では最古の早期縄文時代を除いて、だいたい全貌も判っている。もっとも普遍的なものとしては、洪積台地の地面を数十センチメートル掘り下げて掘建柱を建て、それに屋根を葺きおろして小屋がけをした、竪穴式住居が盛行した。プランは、隅丸の方形や円形に近いものとあって、五メートル内外の直径が普通である。床は素面が多いが、中期から後期にかけて平石、あるいは丸石を敷きつめた床の、いわゆる敷石住居も見られる。こういう住居に、どのく



鏡のような海に容易に漁することができる豊富な魚と貝があったからと、いちおう考えられぬこともない。

これらの遺跡と遺物をおして、当時の縄文人の生活を考察すれば、狩猟と漁撈と山野に自生する植物性食料に依存する採取経済で

弥生式文化編年表

地方	北九州	畿内	伊勢湾	東海道	南関東	東北
後期	雑水伊、餉卷佐、隈町座	穂西新、積辻沢	桜瑞高、穂倉	曲飯登、金田呂	前弥久、野生ガ	南小泉Ⅱ、井
中期	須玖Ⅱ	桑津Ⅱ	貝田町Ⅱ	有東、原添	宮ノ和、須和田	栴形田
	須玖Ⅰ	桑津Ⅰ	貝田町Ⅰ	丸子		
前期	下伊田、立屋敷	瓜破古、唐	西志賀			
	板付(夜白)					

(縄文式文化)

〔考古学講座〕第四巻、杉原莊介に拠る

らしい人数が住んだか、その家族構成はもとより明らかでないが、規模から見て小家族単位であったことは、ほほまちがいない。ただ住居跡が、いくつか密集しているところから、小さな部落が結成されてきたことは推定できる。これが農耕文化にうつって、村へと発展することになるのである。

本郡内には、まだ住居跡の発掘はないが、一宮周辺にもこれら縄文人の堅穴住居がいくつかあって、採取経済の平和な日を送っていたことが容易に想像される。

思えば、これが一宮最古の住民といえるわけで、こんにちの日本人の中に血のつながりなしとは言えず、われわれと、まったく無縁の先住民族ではなかったのである。

弥生式文化 関東・東北地方が、まだ晩期の縄文式文化に栄えているころ、大陸におこった新文明、鉄器時代の波は、北九州の一角にうちよせ、遠賀川流域には新しい文化の花が開いていた。水田に稲を栽培する農耕と金属器を使用する、これまでと全くちがった弥生式土器文化の生活がはじまった。

その土器は縄文式土器と、生地と焼成においての大きな差はないが、比較的堅緻で赤褐色を呈している点などから焼成火度の高かったことが認められている。これは製作技術の、一段の進歩であった、器形と文様の簡素化とあいまって文化的飛躍が推考される。しかも往々にして靱殻圧痕や附着痕のある土器が発見され、また穀物を蒸す土器の甑こしや稲刈用の石庖丁が出土するなど、よく原始農業に入っていた事実を裏づけている。

さて、この新文化は東へ東へと波及し、北九州が前期を終って中期に移るころ、ようやく関東に入って更に東北地方の南半にまでよんだ。ここに、長い縄文式文化は全国的に終末をつけ、次の弥生式文化の時代に移ったわけである。

それは、紀元前三世紀から紀元後の三世紀へかけての年代と推定されている。かくて日本は、新石器時代を経て鉄器・青銅器時代に移り、はじめて農耕文化へと発展したのである。

世界の文明史は、石器時代について青銅器時代、つづいて鉄器時代に移行するのが定式であるが、わが国は両者共存の金属器時代を持つ点に特色がある。これも一に、絶海の列島に孤立し、ながく大陸新文化と隔絶していた地理的必然によるものであるろう。すなわち大陸のように、青銅器から鉄器へという経験を知らず、おくれで一挙にこれを受け入れたのである。

狩猟や漁撈の自然採取と石器だけの生活から離れ、農耕経済に移り、金属器を使うようになって、ひとびとのくらしと世の中は大きく変革していった。農耕は人を土地に定住させ、やがて部落の発生をみるようになり、そして首長を生む社会生活が発達する素地をつくってゆくのである。

弥生式文化は、はじめて金属器を知った時代ではあるが、当初は大陸からの鉄器伝来にとどまり、おくれで青銅器が宝器として移入されたとみられている。したがって前代に引きつづいて、なお種々の石器がそれぞれの用途をもって、ひろく全国に使われていた。中期になると、青銅器の鑄造がさかんに行なわれるようになり、北九

州を中心に広形の銅剣・銅鉾ほこ・銅戈ほこ等が宝器として、また畿内を中心に銅鐸たかが祭器として作られる。いずれも日常の実用品ではなく、祭祀用の儀器と考えられているものである。

しかしながら、この時代を区分する資料として、最も重要な役割をはたしているのは土器であって、石器や金属器の方はこれを補助的に裏づけている。弥生式土器は、縄文式土器と同じく全国に普遍しており、これをもって年代差と地方差を、よくキャッチすることができるのである。

そもそも弥生式土器なる名称は、明治十七年三月、東京本郷向ヶ岡弥生町で発見された土器を標式として、呼ばれるようになったものである。これが、わが国農耕文化のあけぼの期の所産と究明されたのは、さまで古いことではない。昭和のはじめまでは、縄文式をアイヌ系先住民族の遺物とし、弥生式こそわが大和民族の祖先がのこしたものと、となす説すら行なわれていた。そのくらいだから、編年が確立されたのも、縄文式と同じように、今茲の大戦前後のことである。

上に転載する表は、弥生式土器によって編年されたものであるが、この文化が北九州におこって東におよんださまを、よくうかがうことができよう。

表が示しているように、前期の弥生式文化は伊勢湾沿岸まで、東海・関東には達していない。南関東に現われるのは、ずっとおくれで中期以降である。

その中期の土器形式名は、下総市川市須和田および上総茂原市宮

ノ台の両地出土品を標式として呼称されている。縄文式中期以降の文化が、千葉県出土の土器によって究明されたように、弥生式中期のそれも、本県出土土器が重要な資料となったのである。

須和田式は、北九州遠賀川系とみられる西志賀Ⅱ式(現名古屋市貝田町出土)のながれを汲むもので、関東では今のところ最古と目されている。これに次ぐ宮ノ台式は、口縁に二本の紐状突起を持ち、縄文帯や羽状文や櫛目渦状文によって構成された壺形、あるいは鉢形の土器である。ともかく、関東でいちばん古い形式が二つながら千葉県出土の土器を標式とし、その一つが一宮町近くであることは特筆に値しよう。

宮ノ台式をだす遺跡として、神奈川県三崎市赤坂が知られているが、これも東海道を東漸した弥生式文化が相模を経て、いちはやく房総の地に浸潤したかを思わせる。

水田耕作がはじまってひとびとは沖積平野へ進出して、集落をいとなむようになったのである。戦後の大発掘で、世界的に名を知られた静岡市の登呂遺跡は、この時代の生活相や集落の姿をよく復原して見せてくれた。

水田を近くにして住居は密集し、稲を貯蔵する高床式の共同倉庫さえ備わっている。住居は依然として、前代の伝統を継承した竪穴式(掘建小屋)であるのに、倉庫が高床となっているのは、湿気による穀物の腐敗を防ぐための発明と考えられる。しかも、その倉庫には小動物の侵入を阻止する鼠がえしまで工夫されており、われわれは、そこに集団社会の生活の知恵を、まざまざと見せられる感がある。

上 古(一宮地方)

はじめに 弥生式文化が終わりに近づくころには、各地の村落に首長ともいべき有力者の発生をみるようになり、これが豪族となつてその地方に君臨していった。いわゆる小国家分立時代を現出したのである。

こうした小国家群は、小から中へ、さらに大へと統合されて、西暦四世紀の前後には日本国家創世紀の古代社会が発足するにいたる。この大きな統合をなしたのが、畿内におこった豪族—皇室の祖先であつて、大和朝廷がすなわちこれである。大和朝廷を中心とする単一国家、いわゆる大和國家の形成は六世紀のころまでに着々進められ、多くの地方豪族を服属せしめてその支配力を強化していった。

ある。

山武・長生・夷隅の三郡下からも、弥生式土器片は少なからず発見されており、今後もこの方面の関心たかまるとともに、ますます増加するであろう。思えば房総は、関東で最も新文化に敏感な地であり、随処に弥生式集落—農村の萌芽が発生していたのである。こうした原始農村は、発達するにつれて階級社会の性質をおびるようになり、やがて次の首長・豪族の支配する古墳時代に没入してゆくのである。

一言、ここに注意しなければならないのは、弥生式文化が原始農業社会の所産であるといっても、前代の狩猟や漁撈がまったく廃絶したということではない。漁具の大型石錘(弥生式石器)が存在し、また銅鐸にも弥生式土器にも狩猟や漁撈の原始絵画が描かれているとおり、依然として行なわれていた。沖積沃野にめぐまれない瀬海の山岳、あるいは丘陵地帯では、水田稲作など思いもよらず、漁撈だけが生業であつたろう。

しかし、これとてもバックをなす農業経済の影響をうけて、技術的にも進歩し、そして規模も大きくなっていったと思われる。

これを要するに、従来なかった農耕生活が世をおおつて、これが社会をささえる主生業となったということである。すなわち狩猟と漁撈は、弥生式文化の社会にあつては、もはや副次的生業にすぎなかつたのである。

なお縄文式、弥生式両文化時代の一宮附近の各遺跡については、巻末の「一宮町の古代文化」を参照されたい。

そして、その傘下におさめられた地方豪族—小国家群の族長たちは、それぞれの地域で国造(くにのみやつこ)となり、あるいは県主(あがたぬし)となつて服属し、忠誠を誓つた。しかし、なかには次第に強大な富力を持つようになり、土地人民を私有して天皇にしたがわぬ国造もあつた。『日本書紀』巻第二十五にも、

「其の臣・連等、伴造、国造、各々己が民を置いて恣に情のままに駆使す。又国県の山・海・林・野・池・田を割いて己が財と爲し、争戦曰まず、或は数万頃の田を兼併し、或は全く針を容るる少地も無し。調賦を進むる時に及んでは其の臣・連・伴造等、先ず自ら収斂して、然る後に分ち進め、宮殿を修治し、園陵を築造し、各々己が民を率いて事に随つて作す」云々と、その不服従ぶりを記しているほどである。

古墳は、これらの人々が死後の世界を信じて自己の権力と富を誇示していとなまれた墳墓である。考古学はこれを研究対象として、古墳文化と呼び古墳時代といい、その様式や副葬された遺品にもとづき、当該時代の万般の事象を科学的に検討している。戦前まで国教となつていた皇国史学では、古代國家の成り立ちを神話の世界にとじこめ、それぞれの氏族の祖先となつた古代英雄たちの伝承を歴史として信じてこませていた。戦後は、これも遺跡と遺物の考古学的研究により、しだいに明らかにされるようになった。

既に述べたとおり、古墳文化は畿内におこり大和を中心として東へ、また西へとひろがっていったのであるから、これが弥生式文化後期との接続は、東西その時期を異にしている。すなわち弥生式文

化終末期と古墳文化の初頭は、東日本と西日本ではそれ相当の開きがみられるのである。もとより絶対年代は、まだ明瞭でないが、だんだん文献的史料もでてくるため、おぼろげながら把握することができるようになる。史家が、縄文式と弥生式の両文化を先史時代 Prehistoric Age とし、古墳文化を原史時代 Proto-historic Age と呼ぶ所以である。

さて大和朝廷を中心とする単一国家—大和國家の形成は、六世紀ころまでに飛躍的發展をとげ、七世紀をむかえると当時の先進國である唐（支那）の律令制度をとりいれ、大化の改新と呼ぶ改革を断行して大きく成長していった。これが八世紀に入ると、青丹（あおに）よし奈良の都とうたわれた、あの燦爛たる奈良朝文化の花を咲かせるのである。しかしながら、このころになると政權の運営は、天皇家を取りまく貴族の手にゆだねられ、時代の進むにつれて安逸をむさぼる貴族文化へと退嬰してゆく。

そして、次の平安時代に移ると間もなく貴族の墮落とあいまって、早くも律令政治が内部から崩壊の一途をたどるようになり、支配下にあった武門が新興階級としての実力を發揮して登場する。やがて貴族はこの武門武士に打倒され政權をうばわれて、鎌倉時代の武家政治へと移行するのである。

すこしく、それぞれの時代と一宮につき、遺物・遺跡と史料にもとづいて考察をすすめてみよう。

原史時代 古代社会は血によってつながる同族集団で、いうところの本家・分家が長いあいだにわたり、相派生してできあがった

重なるものであった。当時の調査報告から抽記すれば、左のとおりである。

標高六〇メートルの丘陵上に築造された総長七三・五メートルの前方後円墳で、後円部の高さ六・五メートル、前方部の高さ四メートルという大きなもの、もと後円部に熊野神社が祭られてあった。後円部から発掘された棺は、長さ七・五メートル、幅二メートルの舟形木炭槨で、房総では初めて、全国的にも類例の少ないものである。古墳の遺骸埋葬設備としては古い様式で、西暦三乃至四世紀ごろと考えられている。副葬遺物としては、大刀・獸形鏡二・銅鏃八・ガラス製小玉・斧頭・鉈等が発見されたが、このうち銅鏃は千葉県下において初めての出土である。同報告は、本古墳について、つぎのように結論している。

「経済的、政治的な統一は又文化の中心たる事を意味するのであって、能満寺古墳を中心とする地域は東上総の古代文化の中心地であったことが想像される。本古墳発掘に於いて我々は示唆に富む幾多の事実を遭遇した。即ち千葉県下前例なき銅鏃の出土、茶臼山古墳（上野国佐波郡赤堀）と同形式と思われる木炭槨、更に木炭槨上の黒色土層帯と故意に打砕いた土師器、及び分析所見の前例なきかと思う程多量の錫を含有する獸形鏡等である」

（『上総能満寺古墳発掘調査報告』大塚初重、考古学集刊（三）昭和二十四年十一月刊）

古墳最盛期の壮大な古墳群は、上総では君津・市原両郡下にこれを見るが、それに先んじて東上総のこの地に、前期の大古墳があっ

部落にはじまる。この集団が氏族であって、その長を氏上（うじのかみ）、構成員を氏人（うじびと）という。こうした集団であるから祖先を神にまつて崇敬し、氏族社会の政治は、すべてこの祖神の意志命令なりとして、その祭祀を最も重要な行事とした。今にこの祭政一致の語も、氏神（うじがみ）や政（まつりごと）の言葉も、源流をここに発するというわけである。

一宮附近の古墳文化 一宮の周辺に、どのくらいの氏族があったかは詳らかにするを得ないが、古墳分布から考察すると、北西に隣接する旧東村（現長南町）能満寺から久原・大谷木にかけての古墳群に、ひとつの大きな氏族勢力を推定することができる。

特に能満寺古墳群中の最大古墳であるところの前方後円墳は、『長生郡郷土誌』（大正二年五月刊）にも、

「前方方形、後方円形にして側面より見れば半瓢形を為せり。墳上千載の古松亭々として林立す。蓋し大古の築造ならん」と記され、早くから地方人の注目するところとなっていた。

（註）能満寺なる地名は、古墳に接して同名の天台宗寺院があるところからきたものと考えられるが、上総国府のあった市原郡市原村（現五井町）の地も同じく能満であることは、一奇といふべきであろう。今のところ関連を見出たすことは困難であるが、共通点は共に由緒ある上代文化の遺跡に富んでいるという事実が挙げられる。

本古墳は、現在では千葉県指定史跡となつてゐるが、筆者と江沢氏の仲介で明治大学考古学研究室に調査を依頼し、昭和二十二年十一月八日より十日間にわたつて発掘（文学博士後藤守一教授指導）を完了した。その出土遺物は、房総最古の古墳をうらづける珍しい貴

たことは、まこと房総古代文化について多くの示唆をあたえる。

銅鏃は、中央の大和朝廷にいちやく関連をもつた地方國家の存在を、ものがたるものではなからうか。能満寺古墳や久原・大谷木あたりの古墳群をのこした有力な豪族をもつて、この地域に一國造のものたものと推考する人もあるが、『國造本紀』に脱漏多きことを思いあわせるとき、むげにしりぞけがたいものがある。

由来、西上総に上菟上（かみつうなかみ）・菊間（きくま）・馬来田（まくだ）・須恵（すえ）の四國造あるに對して、広大な東上総が武社（むさ）『古事記』は武邪、『続日本紀』は武射・伊基（いじみ）の二國造にとどまるは、すこしくアンバランスに過ぎるの感がある。

古墳の調査研究は近年とみに進んで、本県にあってはもその成果の見るべきものあるこんにち、文献の欠をおぎなつてこの方面から國造の故地を攻究する必要がある。

見聞するところをもつてすれば、前記の西・東上総六國造の故地を、次の古墳群地帯に推定することができる。

市原郡養老川下流の西南地域（上菟上）

同 郡旧菊間村地方（菊間）

君津郡旧小櫃村地方にはじまり小櫃川下流地帯にうつるか（馬来田）

同 郡旧飯野村地方（須恵）

山武郡芝山地方（武社）

夷隅郡大多喜町東方地域（伊基）

(註) 旧小櫃村の俵田古墳は西上総における最古のものと思われるが、これに対して木更津地方に中期以降の大古墳多く、有名な金鈴塚のように飛鳥時代に入るかとみられる副葬品を出した後期古墳もある。小櫃川沃野の開発が進むにつれて、豪族の治地が上流から下流に移動したものであろうか。旧馬来田村と旧中郷村には、奈良朝期の古瓦を出す寺院跡も発見されている。

以上をもつてみれば、一宮西方地帯の能満寺および大谷木・久原の古墳群によって、記録にもれたとする一國造を想定し、東西の比率を三対四とすることは、さまで不自然と思われぬのである。

ともあれ房総半島では、早く安房につづいて東上総の開化がみられ、のち西上総の開発が進んだことを、一宮附近の古墳群は示唆するものである。延喜式名神大社の上総一ノ宮、玉前神社や式内旧社の橋神社と、ふたつながら東上総に鎮座することも、この問題を考える上に大きなウエイトを持つ。

君津・市原両郡の壮大な前方後円墳のあつまり、豪華な副葬品のかずかず、土の至芸品といわれる形象埴輪の豊富さ、どれをとってみても古墳中期以降の文化の高さを誇示しているかに思われる。それに比して、長生・夷隅のそれは貧弱の一語につきよう。埴輪のごときも、長生郡久原古墳の円筒・芝原古墳より出土の人物と鶏埴輪、夷隅郡長者町古墳出土の人物埴輪、その他二、三を知るのみであつて、この点からも東上総の古墳文化は早くすでに凋落したことを示しているかに思われる。

劣勢の國造比率も、こちらの夷隅川・一宮川両流域と、かの地の小櫃川・養老川両沖積沃野との経済力の差にもつづくものであろう。

いくらかも自生している。桑科の植物で、葉は桑に似ており、桑の葉と同形の甘い実を夏になるとつける。以上、本地方とも重要な関連を持つこととして、いささか冗長のきらいもあるも詳記しておく。

之に由つて是を觀れば、突端の安房に印せられた四國阿波の忌部いむべの房総開拓は、その歩みをば太平洋岸に沿つて東上総にすすめ、やがて西上総に及ぼして大成されたものではあるまいか。もとより一つの仮説にすぎないが、かくして後年、親王をもつて國の大守とする東國三大國の一つに發展したと思われるのである。そして下総は、この大國の間に相互影響を受けて開発が進み、これも大國にと成長していつた後進圏とみられようか。

(註) 天長三年(八二六年)九月六日『太政官符』に、上総國に仲野親王、常陸國に賀陽親王、上野國に葛原親王を任じ、これを太守と称したことがみえる。

これを要するに、伊甚と武社阿國造を南北に望むこの地に、早くも大和朝廷につながる國造級の豪族が発生していた事實は、伝承はるびて遺跡・遺物がこれを証明しているといふことができる。

東上総の珠と玉前神 東上総と大和朝廷との関連については、

『日本書紀』卷第十八の次の記載も看過することができない。すなわち安閑天皇の元年(五三四年)夏四月癸丑の朔、

「内膳卿かしわのわか膳臣大麻呂勅を奉りて、使を遣して珠を伊甚に求めしむ。伊甚國造等京に詣ること遅晩くして、時を驗ゆるまで進らず。膳臣大麻呂大に怒りて、國造等を収縛りて、所由を推問ふ。

國造稚子直等恐懼りて、後宮の内寢に逃げ匿る。春日皇后、直に入れるを知らずして、驚駭けて頼れたまひぬ。慚愧ぢたまふこと

東上総の富は、のちに開発された西上総の富の蓄積に所詮およぶところではなかった。これは、近世の米産石高にあつても、依然として変わるどころがない。

されば、のち國府も西上総市原の台に置かれ、また大和朝廷より下総・上総・安房の各國府にいたる官道も西海岸に開けて、『延喜式』に見える馱馬・伝馬に賑わう地帯となつたのである。

(註) 同書二十八の兵部式に、「上総國馱馬一犬前・藤瀨・鳥穴・天羽各五匹。伝馬海上・望陀・周准・天羽郡各五匹」と載っている。

もこれ房総の開化は、『古語拾遺』の神話がなんらかの事實を暗示するとなれば、安房から東上総の地帯へ進められたかとも思惟されるのである。同書には神武天皇の命によつて、

「天富命あめのみこと、更に沃壤を求め、阿波の齋部いひべを分ち東土に率いて行き麻敷あしかたを播殖す、好く麻の生うる所、故に之を總ノ國と謂い、穀ノ木の生うる所、故に之を結城ノ郡と謂う。古語の麻、これを總と謂うなり、今上総・下總の二國、是なり」云々と書かれている。

(註) 穀(かじ)は楮(こうぞ)の木のことである。この纖維で織つたものが木綿(ゆう)であつて、ためにこれをユウノ木と称するのである。草の綿を栽培して、それを木綿(もめん)というのは、後世に属する。これを、穀(音は同じくコク)と間違えて、最近の千葉県刊行物は皆天富命が麻と穀物(こくもつ)の種をもたらしたと書いている。穀は黍・稷・稻・豆・麦などの「たなつもの」、いわゆる五穀であるが、穀物という言葉はずつと後に使われることに注意しなければならぬ。『大字典』に、穀は穀であつて米または禾(カ)を書くと思える。なお、穀(かじ)の木は、今でも房州から上総へかけての山岳地帯に

曰むこと無し。稚子直等、兼ねて闕入罪に坐りて、科重きに当れり。謹みて専ら皇后の為に伊甚屯倉を獻りて、闕入之罪を贖はむと請ふ。因りて伊甚屯倉を定む。今分ちて郡と為し、上総國に属く」(『神典』昭和十一年刊に拠る)

地方で君主の勢威をふるう國造も、中央朝廷に出れば一田舎者にすぎない。あわて、ふためいたあげくが、ところもあるうに皇后寢殿にかけこむという失策をやつたわけである。それはともかく、土地を奉獻して恭順の意を表した伊甚國造といい、中央から下賜されたと思われる銅鏃や鏡を出した能満寺古墳の豪族といい、早くも東上総の地が大和朝廷の傘下に入り、北方に対する前進拠点となつていたことを裏づけている。

さて、珠は「時をこゆるまでたてまつらず」とあるから、調進できなかつたものとみられるが、この中央大和朝廷から要望された珠なるものは、いかなる性質の珠であろうか。一説に真珠であろうというが、しかし古墳文化に真珠流行の痕跡なく、房総の古墳からもいまだ遺物に真珠の出た例を聞かない。

かわつて、房総から関東一円にわたる古墳から発見されるものに、琥珀でつくられた玉類その他の装身具がある。その発掘例はきわめて多く、しかも古墳時代が終末をつけてから奈良朝以降にもおよんで、寺院建築の際の鎮壇具から仏像の莊嚴にまで、さかんに使われている。

これらの点から考えて、この珠なるものは琥珀ではないかと推定されるのである。

琥珀は、今も銚子半島長崎の石切場から盛んに発見され、ここが上代における有力なアンバールトと認められている。さほど遠くない下総香取郡と常陸鹿島郡に、玉造の地名をのこしているものも、銚子から運んだ原石を細工する玉造部の故地ではないかと思われる。しかも一宮の地には玉前神社があり、祭神は玉依姫命ということになっているもの、古くは玉埼神であることに注意しなければならぬ。

『神祇志料』にも、玉前神は明玉を以て靈形と為す云々とあり、御神体が「玉」であったことが知られるのである。

上総一ノ宮の玉については、早くから中央に奇怪な風説が伝えられていたものか、『古今著聞集』の神祇の条に、次の説話が載せられている。

「延久二年（一〇七〇年）八月三日かつさの国一宮の御たくせんに懐妊の後すでに三年におよぶ、いま明玉の国ををさむる時に望で、若みやをたん生すと仰せられけり、これによりて海浜を見ければ明珠一顆ありけり、かの御正体にたがふ事なかりけり、ふしぎなる事なり」

（註）祭神と玉については、『大日本史』も神祇の条下にとりあげて、これを否定している。同書の「玉前神社」のところに、「前或は埴に作る、今長柄郡一宮本郷村に在り、玉前明神は按ずるに諸神鎮座記に云う大日貴命を祀る、是蓋し玉前を以て前玉と為し、遂に幸魂に附会す、信ずべからざるなり、神名帳頭註に宮記高皇産靈命孫玉前命と為す、然るに玉前命古書に見る所なし、或は云う祭神玉依姫、亦確據無し、古今著聞集延久二年本国一宮神、人に憑くと云う、懐孕三年明玉を産む云々と載す、是女神に似たり、然るに其の事怪異にして信ずるに足らざるなり」

も、上総中部山地に沿う地帯に数多くみられるが、しかし東上総の半ばにもおよばない。

横穴古墳は、所在の小部族が自然の山や丘の斜面に遺骸を埋葬するため穿った洞窟であって、群集していることが多い。古墳時代末期の特異な墳墓様式である。

たいていは、羨門（墓穴の入口）を入った短かい羨道の正面に棺床をつくり（玄室にあたる）、遺骸と副葬品を安置し、岩戸をもって入口の蓋をした。

郡下には、天井を屋根形に彫りだしたり、長南町西村の例にみるような柱や梁を朱彩して現わしたもの、また茂原市押日から真名あたりの横穴群中には、棺床を正面と左右両側面に設けたもの、二個あるいは三個の横穴が内部で連絡しているもの、あるいは本納町下太田の横穴にみる原始絵画ふうの線彫など、いろいろと地方色が見られるものがある。

長生郡内における所見の横穴群（二穴以上の集合）所在地を、次に挙げれば、

本納町下太田。茂原市渋谷。同 押日。同 真名。長柄町岩川。
長南町藏持。同 刑部。同 西村。同 久原。一宮町細田。
（六十以上）

等がある。もちろん北部丘陵地帯、長柄町管内には、相当数多くみずもれていると考えられる。

地域的にかたまっているのは、北部から西部山陵地にいちじるしいようである。

と記されている。また『神名帳考証』は玉前神について、「天明玉命、姓氏録に云う、忌玉作、高魂命の孫、天明玉命の後なり、古語拾遺に云う、太玉命率いる所の神名は櫛明玉命なり」と考証している。

土地の伝説としては、塩汲みの老翁が靈夢により波間に光輝を放つ明珠一顆を感得し、海藻をもってつつみ捧持して家にかえるに、その夜耀々と光り止まず、翁すなわち恐れおののいて玉前神社の神宝におさめた、というようなことがつたえられ、諸書に同巧異曲の説話がしるされている。

もとより荒唐の説話であるが、なお諸国にある海上よりの影向上陸神の一分布たるを思わせる。しかも、九月十三日の秋期大祭には近郷鎮座の十二社の神輿を従え、釣ヶ崎より海中渡御をする特殊神事さえある。

玉の海中出現や海上渡幸の神事が、その源流をどういうところに発したかは、容易に究明さるべくもないが、単なる神威の拡張策から出たものとも見られない。あるいは、上古の西日本人の東国経略、いうところの東征の遺留祭事でもあらうか。

もしそうとすれば、近郷十二社も服属した各民族の祖神と見られぬこともない。海中出現は、波にもまれた礫の海岸に打ちあげられるごとく、琥珀玉が海岸にあがったものか、なお将来の研究にまっべきところであらう。

一宮地方の横穴古墳 つぎに古墳時代末期の横穴が、長生・夷隅両郡の山間部に非常に多くなることが注目される。市原郡下に

これが東上総に多いのは、末期の古墳文化が西上総に比すべくもなくなつた消息を伝えているものであらうか。

いずれも、平地帯にある横穴式石室をもつ群集小古墳と全く性質を同じくするもので、性格的には当該地域の家父長制家族を葬むつた墓地群である。

一宮周辺の丘腹にも数多く見られ、細田地区に密集する横穴は、昭和のはじめに県史跡名勝天然記念物調査委員会が調べ、その報告を発表している。

（註）『千葉県史跡名勝天然記念物調査』第五輯、昭和三年三月刊
押日横穴については、明治年代すでに『考古学雑誌』に黒川氏報文あり、昭和に入つて三木氏その他の調査報告がいくつか発表されている。本書所載の江沢氏「一宮町の横穴古墳群」の条参照。

横穴古墳には、高塚古墳にみられるような豪華な、そして豊富な副葬品を伴わない。祭器の須恵器に直刀一つ二つ、そのほか鏃・馬具類・金環などがあれば最上と見られ、全般的にきわめて貧弱である。珍しい例としては、君津郡湊附近と長生郡西村附近の横穴から、鹿角製の鳴鶴が発見されている。

一宮の横穴古墳群も同様、これといった遺物は出ていないが、ひとつには既に早くから開口していて、荒されたことにもよると考えられる。

なお、横穴を目して穴居時代の遺跡とすることは、明治以来ひろく一般に云われていたが、地方人の中には今もつてそのように信じているものがある。